



武士道精神と相互扶助の心で

西岡 裕之

新渡戸稲造の『武士道』

新渡戸稲造氏は、幕末の文久2年（1862年）に盛岡藩の武士の家に生まれました。札幌農学校で学んだ後、アメリカ、ドイツで農政学等を研究し、帰国後は札幌農学校教授、東京帝国大学教授、東京女子大学初代学長、国際連盟事務次長、東京医療利用組合初代組合長を務めるなど、学者、教育者、国際人等として活躍した日本人と言われています。新渡戸氏が『武士道』を刊行することになったきっかけは、その序文に次のように記されています。

明治22年（1889年）頃、ベルギーの法学者ド・ラブレール氏の家で歓待を受けている時に宗教の話題になった。「あなたの国の学校には、宗教教育というものがないのですか」と尋ねられ、ないと答えると、「宗教なしで、いったいどのようにして子孫に道徳教育を授けるのですか」と繰り返された。その質問に愕然として、即答できなかったが、心の中に湧いてきたのが幼少の頃の家庭の教育であり、武士道であった。

そして、明治33年（1900年）に、アメリカ滞在中に英文で書いた『BUSHIDO THE SOUL OF JAPAN』をフィラデルフィアの出版社から刊行し、武士道こそ日本人の道徳の基礎にあるものだということを紹介しました。ポーランド、ドイツ、ノルウェー、スペイン、ロシア、イタリア等、各国の言語にも翻訳されたそうです。

武士が守るべきものとして要求された道徳的徳目の作法である武士道は、武士の物語を主たる題材とした芝居、寄席、講釈、浄瑠璃、読本等の大衆娯楽を通じて、江戸時代に国民一般に伝わったと言われています。そして、近代日本を建設した人々の原動力となったとも言われています。「義」、「勇」、「仁」といったその根本精神は、裏取引や不正な行ないほどいまわしいも

のではないとし、勇気とは正しいことをすることであるとしています。また、弱者、劣者、敗者への側隠の心を至高の徳としています。

数学者の藤原正彦氏は、著書『国家の品格』の中で、「弱者、敗者、虐げられた者への思いやり」こそ武士道精神の中軸であるとし、父親（作家の新田次郎氏）からいつも「弱い者いじめの現場を見たら、自分の身を挺してでも、弱い者を助ける」、「弱い者がいじめられているのを見て見ぬふりをするのは卑怯だ」と言われていたと書いています。

東日本大震災の時、暴動や略奪を起こすことなく、列に並んで配給を待つ被災者の姿に、驚いた外国人もいたそうですが、日本人には、今でも、自分を律することのできる武士道精神が宿っているとされています。

協同組合の共済事業

各種協同組合法による協同組合は、保険技術を使って共済事業（生命共済、火災共済、自動車共済等）を行っています。協同組合は、「一人は万人のために、万人は一人のために」という言葉に象徴されるように、生活の改善を願う人々が自主的に集まって、自らの手で様々な事業を行う、人と人の結びつきによる組織であり、組合員への最大奉仕を事業の目的とし、営利を事業の目的としない組織です。協同組合の共済事業は、出資者であり利用者（共済契約者）であり運営主体（共済者）である組合員により、民主的に管理されます。

共済は、私たちの生活を脅かす様々な危険に対して、組合員があらかじめ一定の共済掛金を拠出して共同の財産を準備し、不測の事故等が生じた場合に共済金を支払うことによって、組合員や家族に生じる経済的な損失を補い、生活

の安定を図る助け合い（相互扶助）の仕組みです。協同組合の共済に加入することは、相互扶助の生活保障の活動に参加することになります。ある共済契約者が、共済金を受け取ったお礼を言いに行ったら、組合長から「共済というのは、全国の組合員がもしものために少しずつ共済掛金を掛け合って助け合っているんです。今回は、たまたま全国の組合員から助けもらったんです。これが相互扶助というものです。」と言われたという話がありますが、万一、死亡や入院、火災や自然災害による住宅の損害、自動車事故による相手への賠償や自動車の損害等が自分に生じた場合には、組合員皆の共済掛金をもとにした共済金に助けられ、組合員の誰かに生じた場合には、自分の共済掛金も共済金として役立ててもらふことによって、組合員皆で助け合い支え合うことができるのです。

そして、協同組合の共済事業に携わる役職員は、相互扶助の生活保障の活動の推進者として、組合員からの日々の言葉に力をもらいながら、共済の仕組開発・普及推進や共済事業の健全性の維持・向上に取り組んでいます。「共済に加入して本当によかった」という組合員の声に「お役に立ててよかった」とうれしく思い、「生活保障の点検や見直しをしたい」という相談に「信頼されている」、「期待を裏切らないようにしなければいけない」と喜びと責任を感じ、「あとは任せてくださいと言われて事故や病気の時心強かった」という感謝の声に「頑張ってたよよかった」と誇りに思い、「低保障や保障切れや未加入で役に立たなかった」とお叱りの言葉をいただいた時には「必要な保障を必要な人にきちんと説明してお勧めできるようにならなければいけない」、「二度と同じ後悔はしたくないしさせたくない」と気持ちを新たに、組合員に安心と満足を届けることに邁進しています。

日本の大正から昭和にかけて、社会運動家として弱者救済を訴え、組合運動の先覚者として今日の労働組合、生活協同組合、農業協同組合

等の礎を築いた賀川豊彦氏（1888年～1960年）は、マハトマ・ガンジー、アルベルト・シュバイツァーと並び20世紀の三聖人と称され、日本人初のノーベル文学賞・平和賞候補にもなりました。

武士道精神と相互扶助の心で

アメリカでは、過激な市場原理システムにより、経済的「弱者」を食い物にした「貧困ビジネス」が拡大したとされています。ジャーナリストの堤未果氏は、著書『ルポ貧困大国アメリカ』の中で、学資ローンの返済や医療費の支払等に圧迫される人々の姿を取り上げ、「「弱者」が食い物にされ、人間らしく生きるための生存権を奪われた挙げ句、使い捨てにされていく」とし、「単にアメリカという国の格差・貧困問題を越えた、日本にとって決して他人事ではない」流れと警鐘を鳴らしています。そのアメリカでは、今年（2017年）の1月、「取引」が基本的な行動原理と言われているドナルド・トランプ氏が、「アメリカ第一主義」を掲げて第45代アメリカ大統領に就任しました。

イギリスでは、昨年6月の国民投票で欧州連合（EU）離脱の意思が示されました。イギリスのメイ政権は、経済格差に不満を募らせた国民が離脱を支持したという見方から、格差の解消に取り組み始めたと言われています。

世界は、変わり始めています。日本人として、そしてまた、協同組合の共済事業に携わる者として、武士道精神と相互扶助の心を行動の規範として、大切にしながら続けていかなければいけないと思っています。

50年先も100年先も平和で豊かで安心して暮らすことのできる日本の社会をつくり続けるためには、協同組合の組合員・役職員が一丸となって、組合員や地域への役割をきちんと果たし、協同組合の価値を多くの国民にしっかりと認識してもらうことが重要です。

（日本共済協会 専務理事）